

役割を地下鉄に持たせたのは、地下鉄の持つ特有の性質、「真っ暗で外界（移動経緯）が見えないこと」、「方向感覚を失いやすいこと」、そして地下空間の性質「コンクリートで固められていて、地上が見えないこと」、そして乗換のできる便利な駅にしようとしたためにできあがってしまった複雑な駅構造、という要素があるからである。これらの要素を使って小説を違和感なく読者に読ませようとするということは、万人の中に共通して潜んでいる、地下鉄に対するある感覚や印象があると浅田自身が考えているからである。そこに目をつけ、人間の地下鉄に対するイメージを代表するものとして、私はこの小説を選んだ。

実際に分析する中で、東京という大都市特有の複雑な路線網が与える影響、それを受けて人

間がどのように考え動くか、また地上と遮断された地下の中で人がなにを感じるかということが徐々に見えてきた。しかし、現代の情報化社会の中で地下鉄の乗換を考えたとき、さらに地下鉄と地理というものはリンクしにくくなる。となると地下鉄に対する不思議な感覚はデジタルを使って解決されていくものになるのであろうか、という、それは必ずしもそうではないと私は考える。パソコンや携帯電話の画面からは得ることのできない地下鉄の乗車や地下空間での経験は、これから先も地下鉄がある限り人間の中からなくなるものではない。逆にこれから時代に合わせて変わりうる地下鉄の環境自体も、さらに何か新しい、これまでとは違った感覚を与えてくれる能性があると私は思っている。

グリーンツーリズムとまちおこし —高知県四万十市西土佐を事例に—

西山雅子

近年、農山漁村での滞在型余暇活動であるグリーンツーリズムが注目をあびている。以前のマスツーリズムによる環境破壊の反省や農山漁村の過疎化・雇用問題などいくつかの条件が重なり、1970年代ヨーロッパで広がった。その後1992年、農林水産省が「グリーンツーリズムの提唱——農山漁村で楽しむゆとりある休暇を」という中間報告書を提言したことから日本でも本格的に取り組まれ、現在では全国各地に普及するに至った。中間報告書においてグリーンツーリズムは「緑豊かな農村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と定義される。

グリーンツーリズムは都市住民にとって「ゆとりある休暇」を提供するのみではなく、農山漁村の環境保全や農山漁村地域における経済的・社会的効果をもたらし、農山村地域にとっての地域活性化政策となるのだが、現在日本のグリーンツーリズムは特に後者の効果に期待するものが大きい。

高知県四万十市西土佐は、2004年構造改革特別特区として「グリーンツーリズム特区」に認

定され、役場を中心にグリーンツーリズムによる地域活性化が図られるようになった。しかし、地域住民にとってグリーンツーリズムはなじみ深いものではなく、決して順調に進められたわけではなかった。そこで、地域住民が地域の魅力を認識・再認識し、何ができるか、何が必要かを考えることからはじめた。まだ、地域住民が自主的に参加するためのきっかけづくりの段階であり、今後、この動きが発展し、地域住民に広がるかどうかには西土佐の将来はかかっているだろう。

西土佐には、外から定住した人々がいる。西土佐に魅了され住みついたのである。現在、西土佐でグリーンツーリズムの取り組みに参加している。「外から見た西土佐」をもっともよく知る彼らが、新たな視点から西土佐の活性化を考え、地域住民と共に取り組むことができれば、西土佐は元気を取り戻していくであろう。まだまだ西土佐のグリーンツーリズムははじまっただけである。しかし、彼らの「地域活性化させたい」と強く語り、地域・地域住民と関わっていく姿から西土佐のグリーンツーリズムの可

能性をみた。グリーンツーリズムは、「都市住民へのゆとりある休暇」と定義されるが、グリーンツーリズムが提唱されて数十年、現在は、む

しろ「地域を元気にするもの」「まちづくり・まちおこし」としての役割が大きいといえるだろう。

奥多摩地域シカ食害の現状と課題 地元インタビューと23区意識調査を踏まえて

萩原 あずさ

野生動物は人類の共有財産であるという考え方が、生物多様性条約などによりグローバルな共通認識となりつつあるが、一方で野生動物と人間生活との軋轢も大きくなっている。日本全国での野生動物による農林業被害は200億円を超えるといわれる。そのなかでも、1990年代以降、シカの食害が急増している。

東京都においても、平成16年7月、奥多摩地域のシカによる森林破壊がクローズアップされ、本年9月、東京都は初めてシカを対象動物として、鳥獣保護狩猟法にもとづく特定動物保護計画を策定した。これによって、囲い柵や防除ネットの設置などに加えて、現在生息が推定されている2000頭のシカを平成20年度までに400頭に削減するという大規模な個体数調整に舵が切れ、シカ狩猟の緩和と管理捕獲の実施が宣言された。

本稿では、まず、日本での農林業被害、シカの生態を概観したうえで、奥多摩地域のシカに焦点を絞って、その生息実態、農林業への被害実態、捕獲の状況を明らかにした。続いて、奥

多摩地域の森林の再生とシカとの共存を目指して策定された「東京都シカ保護管理計画」のワイルドライフ・マネージメントの理念とそれに基づく具体的な対策を分析した。

それを踏まえて、筆者が独自に実施した奥多摩町長をはじめとする地元関係者へのインタビューと23区住民意識調査を報告した。そこから見えてくるものは、世界都市として繁栄を続ける大都市東京の片隅で進行する過疎と高齢化、林業の衰退、個体数調整の担い手である猟友会の疲弊、科学的な生息数調査の重要性と困難さ、奥多摩町が観光の起爆剤と考える食肉化事業の前途多難、そして、奥多摩地域の森林とシカ食害についての無関心であった。

豊かな森の象徴として親しまれてきたシカが、奥多摩地域で真に人間社会と共生していくためには、都民が当事者意識をもって、東京の水源を育む森林のあり方を考え、モニタリングによる検証を前提としている「シカ保護管理計画」の今後を注視していくことが必要である。

メイド喫茶から眺める秋葉原の変化 —アキバ、メイド喫茶ブームをめぐって

長谷川 未来

近年オタク文化が注目を集め、「アキバ系」「萌え」といった言葉がメディアでも大きく取り上げられる「オタクブーム」が起こっている。かつては日本一の電気街であった秋葉原は、現在では日本一のオタク街としての方が名高く、ブームの波を受けて街の様相をめまぐるしく変えている。

オタク街としての秋葉原を語る言説の中で必ずといって良いほど取り上げられるのが「メイ

ド喫茶」だ。かつてはオタク層を対象としたマイナーな存在であったメイド喫茶は、いまや外国人客も訪れる程の観光名所となっている。ブームの盛り上がりとともに秋葉原は観光地化し、メイド喫茶にはガイドブック片手の一般客が押し寄せさながら観光名所の扱いを受けている。メイド喫茶自体がここ数年で出来た新しい文化であるにも関わらず、その認知度はいまや一般層にまで広まっているのだ。この波を受けて秋